

日本ロレンス協会 第57回大会プログラム

- ◎日時： 2026年6月27日（土）、28日（日）
◎会場： 西南学院大学
1号館304室
（日本ジェイムズ・ジョイス協会との合同シンポジウムは1号館303室）
住所： 〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92
連絡先： 西南学院大学外国語学部 加藤洋介
Tel: 080-4697-1905
e-mail: y-kato@seinan-gu.ac.jp

◎交通アクセス：

■ 福岡空港から

福岡市地下鉄（約18分）

西新駅から徒歩約5分

■ 博多駅から

福岡市地下鉄（約13分）

西新駅から徒歩約5分

- ◎昼食のご案内 西新駅周辺に飲食店が多くあります。

【役員会】

大会前々日（予定）にオンライン(Zoom)で実施します。

【大会1日目】 6月27日（土） 13:00～

受付： 12:30～

総合司会： 加藤 洋介（西南学院大学教授）

- ◎ 開会の辞： 会長 木下 誠（成城大学教授） （13:00～ 1号館304室）

研究発表 1 （13:10～13:45 1号館304室）

司会 新井 英永（熊本大学教授）

「イギリスよ、わがイギリスよ」における二つのイギリス人像

大江 公樹（早稲田大学非常勤講師）

◎ 総会 (13:55~14:30 1号館 304室)

司会 木下 誠 (成城大学教授)

*休憩および303号室へ会場移動 (14:30~14:40)

シンポジウム (14:40~17:40 1号館 303室)

〈日本ジェイムズ・ジョイス協会・日本ロレンス協会 合同シンポジウム〉

ジョイス×ロレンス——文体と身体

司会 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

ロレンスとジョイス
——モダニズム再考への足掛かり

講師 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

己を与える——ジョイスとロレンスの愛の変遷を再考する
(『エグザイルズ』と「死んだ男」を中心に)

講師 小林 広直 (明治大学准教授)

モダニズムの言語様態
——ジョイスとロレンスの文体原理

講師 今関 裕太 (名古屋大学准教授)

共通の舞台を手作りしてみました
——「もの」の霊性史

講師 武藤 浩史 (慶應義塾大学名誉教授)

◎ 懇親会 日本ジェイムズ・ジョイス協会と合同 (18:30~20:30)

会場: 西南学院百年館 (松緑館) 1F 多目的ホール

費用: 6,000円 (税込) (大会当日受付でお支払いください)

【大会 2 日目】 6 月 28 日（日） 10：00～

研究発表 2 (10：00～10：35 1号館 304室)

司会 井出 達郎（東北学院大学教授）

ルパート・バーキンとは何者か？
——『恋する女たち』に表れる文化資本の表象

上石田 麗子（國學院大学教授）

ミニ・ワークショップ（発題＋フロアディスカッション） (10:45～12:30)

『虹』の新訳に向けて

発題者 大山 美代（近畿大学講師）
——『虹』の新訳 ミニ・ワークショップに寄せて

フロアの参加者を交えた意見交換

（ファシリテーター 木下 誠）

◎ 閉会の辞： 副会長 岩井 学（甲南大学教授）

研究発表 1

「イギリスよ、わがイギリスよ」における二つのイギリス人像

大江 公樹

「イギリスよ、わがイギリスよ」では、主人公エグバートによる、家庭における権威を否定し社会的な責任をも無視する自由な生き方と、義父ゴッドフリーによる、権威と社会的責務の中に生きようとする家父長的な生き方とが対照的に描かれる。先行研究は両者について、それぞれの魅力と限界を指摘してきたが、両人物の血統や民族的特徴の描写の意味は十分に検討されてこなかった。古いサクソン人の王と同じ名である主人公エグバートは「白い肌に金髪の絹のような髪」を持つ南方人であるのに対し、ゴッドフリーとその家族は黒みがかった肌をした北方人と描かれているが、本発表はまず「イギリスよ、わがイギリスよ」の1915年版と1921年版との差異に着目し、ロレンスが両人物について血統と民族的特徴を強調するよう書き替えて行った様を見る。その上で、『虹』や『恋する女たち』など中期小説における血統の描写との比較を行い、二つのイギリス人像が中期ロレンスの思想において持つ意味を考察する。以上の検討により、「イギリスよ、わがイギリスよ」が、男女間の愛をはじめとする個人の生における問題の根源を、血統の、あるいは民族の差異に探ろうとした側面を持つことを明らかにする。

シンポジウム

〈日本ジェイムズ・ジョイス協会・日本ロレンス協会 合同シンポジウム〉

ジョイス×ロレンス——文体と身体

古くからモダニズム研究に親しんできたシニア世代の研究者の頭には、若い頃に読んだT・S・エリオットやF・R・リーヴィスのジョイス対ロレンスという枠組が埋め込まれているかも知れない。これを修正しようとする論集 *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence* (2015, UP of Florida) のような散発的な試みがあつて、新井英永（日本ロレンス協会元会長）の優れたジョイスとロレンスの比較論考が含まれているにもかかわらず、さほど読まれているようには見えない。

新モダニズム研究 (New Modernist Studies) と共に育ったヤング世代は、その辺の事情にあまり関心がないかも知れない。研究作品対象を拡張させ、女性の、帝国の、民族の、その他の格差の観点から、幅広い考察を目指す新モダニズム研究は、しかしながら、60代の研究者にはあまり評判が芳しくない。『英文学研究』第100号(2023)に掲載された田尻芳樹による Douglas Mao 編 *The New Modernist Studies* の書評、それに続いて、同誌101号(2024)に掲載された筆者(武藤浩史)のレベッカ・ウォルコウィッツ『生まれつき翻訳』の書評では、いずれも新モダニズム研究の視点拡張には焦点拡散と議論浅薄化の副作用が伴うと指摘されている。今回初めて、日本ジェイムズ・ジョイス協会と日本ロレンス協会が合同シンポジウムを開くのであれば、研究の未来を見据えて、新たなアプローチの可能性を探るべきであろう。でも、どんな視座で？

ジョイスとロレンスを共通の土台に載せることが肝要だろう。彼らが書き残した文章の抜きん出た質とそのような彼らの文章を通して可能になった生々しい身体表出。まずは、そこから始めよう。かつてジョイス研究を先導した大澤正佳先生には、『ジョン・トマスとレイディ・ジェイン』と題した、ロレンス『チャタレー夫人の恋人』第2稿(全部で3つの稿がある)の邦訳がある。ロレンスの一見雑な文章を最初いやいや訳しはじめた大澤先生からは、最後には「ジョイスはスゴイがロレンスも別の意味でスゴイと思う境地になった」というお

話を直接うかがった。だからテーマは、文体と身体。そして、「ジョイス×ロレンス」の「×」は「ジョイス対ロレンス」の意味ではなく、「ジョイスとロレンスを掛け合わせる」という意味に捉えてほしい。(文責・武藤浩史)

ロレンスとジョイス——モダニズム再考への足掛かり

浅井 雅志

モダニズム小説の両巨頭といえるロレンスとジョイスは長らく正反対の存在と見なされてきた。一方の作品を高く評価する人々は他方の作品を称賛することは少ない、いやそれ以前に、両者に同等に注目する研究者自体が少ない。リーヴィスがロレンスを“un-Joycean”とか“how radically unlikely Joyce”と評して以来、この見解は広く受け入れられ、二人を正面から扱う議論は長らく避けられてきた。その間、両陣営はそれぞれ、学術的なつながりをほとんど持たないままそれぞれの「産業」を営んできた。しかしこうした状況を生み出した張本人はロレンスとジョイス自身だとも言える。両者は互いに辛辣な批判を浴びせ合い、それぞれの研究者・崇拝者たちは、多かれ少なかれ彼らの見解を裏付けてきた。

本発表では、まずロレンスとジョイスの小説観の考察を通してこの溝の実態を明らかにしたい。両者ともに「技術的な革新」によって「小説の構造全体を破壊した」(Walter Allen)が、その「破壊」の仕方は対照的である。それを明らかにするために、それぞれの作家の功績を称賛する両陣営の意見を概観し、次いで、議論をより具体的にするために、『チャタレー夫人の恋人』と『ユリシーズ』における結婚と姦通の扱いを考察することで、二人の「革新」がいかなるもので、なぜ両者への賞賛は交差してこなかったのかについて考えてみたい。二人の小説家の業績を対照的に考察することが、小説の機能や使命という根本的な問いに、さらにはモダニズムと呼ばれる巨大な文学・文化運動の再考に有益な光を当ててくれればと思う。

己を与える——ジョイスとロレンスの愛の変遷を再考する (『エグザイルズ』と「死んだ男」を中心に)

小林 広直

本発表はジェイムズ・ジョイスとD・H・ロレンスがそれぞれ愛についてどのように己の考えを展開していったかを再考するものである。言うまでもなく、愛という巨大な主題を、しかもモダニズム文学の二大作家がどのように考えてきたかを分析するには一度の発表では到底時間が足りない(何より、発表者の力量が圧倒的に足りない)。しかし、ジョイスにおいては、最高傑作の『ユリシーズ』(1922)の〈前〉に書かれた戯曲『エグザイルズ』(1918)に、ロレンスにおいては、最高傑作の『チャタレー夫人の恋人』(1928)の〈後〉に書かれた「死んだ男」(1929)に、それぞれ愛と密接に関わる「与える」という行為が共通して存在する(勿論ここには「宗教」というもう一つの巨大な主題が横たわっている)。つまり、『エグザイルズ』では「自由に己をすべて与える(give yourself freely and wholly)」こと、「死んだ男」では「欲を抱かずに与え、受け取り、そして受け取り、与えること(to give and to take, to take and give, ungreedily)」、その可能性と不可能性が問われているのではないだろうか。これまで両作家における愛という主題については(あまりに)多くの先行研究があるが、この両作品を比較したものはほとんど存在しない。しかし、ジョイスとロレンスが、上述の代表作で各々追究した愛の主題は、彼らのキャリアにおいてどのように発展・展開していったのかを『エグザイルズ』と「死んだ男」という比較的短い作品から改めて考えることで、しばしば対比的に扱われる両作家の共通点を炙り出し、さらには技巧の面から語られることの多いモダニズム文学の新たな思想的側面に光を与えることができれば、と考えている。

世紀転換期頃から顕著になった〈モダニズム〉概念の拡張は現在もとどまる気配を見せず、無際限と思えるほどにその外延を広げつづけている。この拡張運動に対しては、西洋中心主義・英語帝国主義・学術的曖昧さをはじめとする諸点を切り口とした様々な批判が向けられてきたが、そうした批判すらも〈モダニズム〉概念の拡張を活性化してしまうような言説構造が成立したのも、もはや最近のことではないと言える。こうした、無限の拡張可能性に満ちているように思われる一方で強固な閉塞感を抱かせる状況を前にしてできることは、この概念をひとまず透明視したうえで文学史上の系譜や構造を効果的に名指す何らかの概念を彫琢するか、あるいは〈モダニズム〉の原点に立ち戻り、その根底的な原理と言えるものを改めて浮かび上がらせることで状況に間接的な歯止めをかけることくらいしかないように思われる。

本発表では、代表的なモダニストであるジョイスとロレンスの小説、とりわけその文体に着目することで、後者の方策を試みる。その際に手掛かりとするのが、デイヴィッド・ロッジがロマン・ヤコブソンの議論に基づいて提示した古典的な枠組みである、言語の隠喩的原理と換喩的原理の区分である。『チャタレイ夫人の恋人』をはじめとするロレンスの小説においては、文どうしや段落どうしの論理的関係を丁寧にしつつ言い換えや情報の追加を小刻みに行う文体が多く見られ、一見すると換喩的原理が強力であり、ロレンスはそれを巧みに統御しているように思える。しかし、そうした文体を通して隠喩的に浮かび上がってくるのは、言語の統御に対する不能の感覚である場合が少なくない。対照的に、『ユリシーズ』以降のジョイスの文体には、チャールズおじさん原理やベンストック原理の作動を通して隠喩的原理が換喩的原理を圧倒していく過程がきわめて頻繁に見られるが、そこには明らかに、言語が話者や書き手の意志を超出して躍動する感覚が見て取れる。このように、一見すると対照的にも見えるロレンスとジョイスの文体には、隠喩的原理と換喩的原理の緊張ないし闘争関係を通して、言語の統御に対する著しい困難の感覚が浮かび上がってくるという共通点が認められる。この分析の妥当性を問うとともに、このような共通点がモダニズムの原理の一つとみなされうるかを考えてみたい。

共通の舞台を手作りしてみました——「もの」の靈性史

武藤 浩史

個人作家研究を突き抜けて、個と個——ここではロレンスとジョイス——を繋ぐための枠組を探してきて、「もの」に突き当たった。田尻芳樹の近著『日常という謎を生きる——ウルフ、小津、三島における生と死の感触』にはそこに繋がるような「事物の知覚」の「存在論的意味」を考察する記述があって、強い共感を覚えた。だが、「もの」関連での「主義っぽい」もの——Thing 理論、新モダニズム研究の中の「もの」研究(Douglas Mao, *Solid Objects*)、New Materialism、思弁的实在論——は、それらが取りこぼしているものが気になって、どうにも居心地が悪い。あるいは、使い勝手が悪い。個人作家のテクストの魅力と歴史的コンテクストの興味の両方を生かせるアプローチはないものか。足りないものを気にしながら、賢しらな議論をするのは気が進まない。

そこで、最近はずり手作りにはまっている。その一端——ナンチャッテ「もの」の靈性史——を紹介して、まずはそれぞれに抜きん出た**身体**＝「もの」的リアリティを描出する文体を創造したジョイスとロレンス（とウルフ）を同じ土俵に載せることの可能性を示したい。

研究発表 2

ルパート・バーキンとは何者か？ ——『恋する女たち』に表れる文化資本の表象

上石田 麗子

本発表は、D・H・ロレンス『恋する女たち』におけるルパート・バーキンの位置づけを、「文化資本」の観点から再検討するものである。ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン』（1979年）および『文化生産の場』（1993年）の議論を手がかりに、本作における階級は単なる消滅ではなく、資本形態の変容として再編成されていることを明らかにする。

作中において、ジェラルドは経済資本を、グドルーンは文化資本を体現するのに対し、バーキンはそのいずれにも明確には属さない特異な位置にある。彼は安定した収入によって経済的には自立しつつも、その出自や社会的基盤は曖昧であり、あたかも階級から遊離した存在のように振る舞う。しかしブルデューの理論に照らせば、この「超越性」はむしろ不可視化された資本によって支えられたものであり、真の無階級性ではない。

さらにバーキンは、グドルーンの「優越性」を言語化し、価値づける役割を担うことで、象徴資本の配分に関与する。すなわち彼は、文化資本の価値を認定する審級として機能し、他者の位置づけを規定する権力を行使しているのである。このようにバーキンは、階級構造の外部に立つ人物ではなく、むしろ新たな文化資本中心の秩序を媒介し、正当化する存在として理解されるべきである。

以上より、『恋する女たち』は階級の解体ではなく、その再編成を描く作品であり、バーキンはその変容を体現する鍵的存在であることを明らかにする。

ミニ・ワークショップ

『虹』の新訳ミニワークショップに寄せて

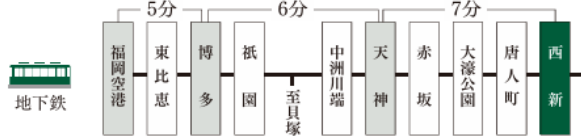
大山 美代

The Rainbow が日本に受容されたのは、過去の二度の翻訳という大きな仕事のおかげである。宮島新三郎・柳田泉による『虹』の完訳が、1924年（大正13年）に新潮社から刊行されたのをはじめとして、1951年（昭和26年）が初版である中野好夫訳は、1975年に文庫本として改訂され、長く普及している。しかし、これらは今なお古書として入手可能ではあるものの、すでに絶版状態である。

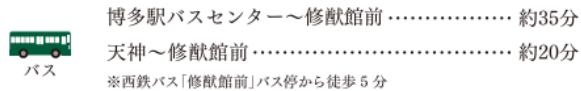
大正から昭和、平成、令和と三つの時代を経て、ロレンスの「没後百年」という数字が近づく今、*The Rainbow* という大著の邦訳が二度しか世に出ていないという事実は、どのように受け止められるべきだろうか。現在の大学生や一般読者層が、中野訳の『虹』を読もうとすると、いかに名訳であろうとも、半世紀を超える歳月の流れによる本の古さや、現代の言語感覚との違いに気を取られ、読みたいという意欲が負けてしまいかねない。新訳が刊行されている『チャタレー夫人の恋人』や『息子と恋人』の方が手に取られていく現実を、私自身目の当たりにしたこともある。『虹』という文学的遺産を現代の読者に広く、長く継承していくために、新訳を發表することは、私たちの重要な使命の一つなのではないだろうか。協会員の先生方と、貴重なご意見を交換できる場となれば幸いである。

西南学院大学までのアクセス

福岡市地下鉄西新駅1番出口から徒歩約5分



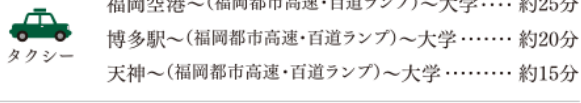
※地下鉄西新駅(1番出口)から徒歩5分



博多駅バスセンター～修猷館前……………約35分

天神～修猷館前……………約20分

※西鉄バス「修猷館前」バス停から徒歩5分



福岡空港～(福岡都市高速・百道ランプ)～大学……………約25分

博多駅～(福岡都市高速・百道ランプ)～大学……………約20分

天神～(福岡都市高速・百道ランプ)～大学……………約15分

西南学院大学キャンパスマップ

